

第3章 ろう者バレーボールにおけるカスケーディングとソーシャル・リフレクション — 「相互反映性」と「文脈依存性」 —

ろう者バレーボール班

0. はじめに

フィンランドのろうコミュニティについての研究を行ったマッキープニー (McIlvenny) は、彼らの相互行為を分析した。彼はこの研究の中で「カスケーディング (cascading)」と「ソーシャル・リフレクション (social reflection)」という現象を見いだした。

さて、私たちらう者バレーボール班は、ろう者バレーボールチームの練習を観察し、そこで行われる相互行為について分析を行った。私たちがこの研究の中で検討することは、彼らの相互行為においてどのように「相互反映性 (reflexivity)」と「文脈依存性 (indexicality)」が表れているかである。

まず、この節においては私たちが検討するこの二つのキーワードに関して解説する。それにより、私たちが、エスノメソドロジーの立場に立って分析するということを明確にしておきたい。以下より浜の論文 (1992「現象学的社会学からエスノメソドロジーへ」) に主として依拠しながら「相互反映性」と「文脈依存性」について簡単に解説する。

「文脈依存性」と「相互反映性」は、ガーフィンケル (H. Garfinkel) が、日常的な相互行為場面における、知覚作用の特質に名付けたものである。これは、シュッツ (A. Schutz) の対象の理論がもとになっている。シュッツの理論においては、知覚された対象は、それが物であれ行為であれ現実の対象とは区別されない。知覚されない対象はもはや対象と言うには不適切なものである。さらにガーフィンケルはここから、様々な仕方で知覚されるべき対象 (現実) というものは存在しない、と述べている。

ガーフィンケルはこの理論をもとに、相互行為における秩序の問題を「他者の知覚」の組織化という問題に翻訳した。そして「他者の知覚」を説明するために「物象化」と呼ばれる理論図式を展開する。「物象化」は二つの働きからなっている。第一に、感覚に与えられたシグナル (例えば、物体であればその形) がデータ、あるいは「経験の可能性」に理念化される。つぎに、多くのデータの中から、「物象化原理」に従ってあるものが選出され、それらが互いに関連づけられることによって、意味の統一体、すなわち「対象」が構成される。

「相互反映性」と「文脈依存性」とはこの物象化 (知覚のメカニズム) に関してそれぞれ異なる要素を指し示すものである。「相互反映性」とは、データと物象化原理が相互に参照し合うことによって知覚が形づくられ、それ以外に知覚の根拠が存在しないことを指している。そして「文脈依存性」はある対象が、状況によって異なる対象として知覚されることを指しているのである。

1. 調査概要

この研究は、エスノメソロジーにおけるビデオ分析の手法を用いて、ろう者がバレーボールの練習という相互行為場面で、どのように相互行為を行っているかを明らかにしようとするものである。

調査の対象は、T市内の聾学校の体育館で毎週月曜、金曜の夕方から練習を行っているろう者のバレーボールのチームである。調査は平成11年6月25日・7月9日・12日・16日・8月9日・27日の合計6回行われた。平成11年7月16日、8月27日の調査では体育館で四台のカメラを用いて練習をビデオ撮影した。7月16日分は練習だけを、8月27日分は練習と試合形式での練習試合を撮影した。ビデオ撮影のうち、8月27日分を分析に使用した。(ビデオカメラの配置は図1に示す。)

撮影に関しては、事前にバレーチームのコーチとメンバーに調査依頼状を出し、調査の許可を得た上で行っている。上記のように撮影されたビデオのデータの中から分析可能な場所を選び、必要に応じて動作などを記載した画像トランスクリプトを作成した。この論文の分析は、こうして作成されたトランスクリプトに基づいている。なお、論文中で用いた図は8月27日分のビデオデータをもとに作成している。

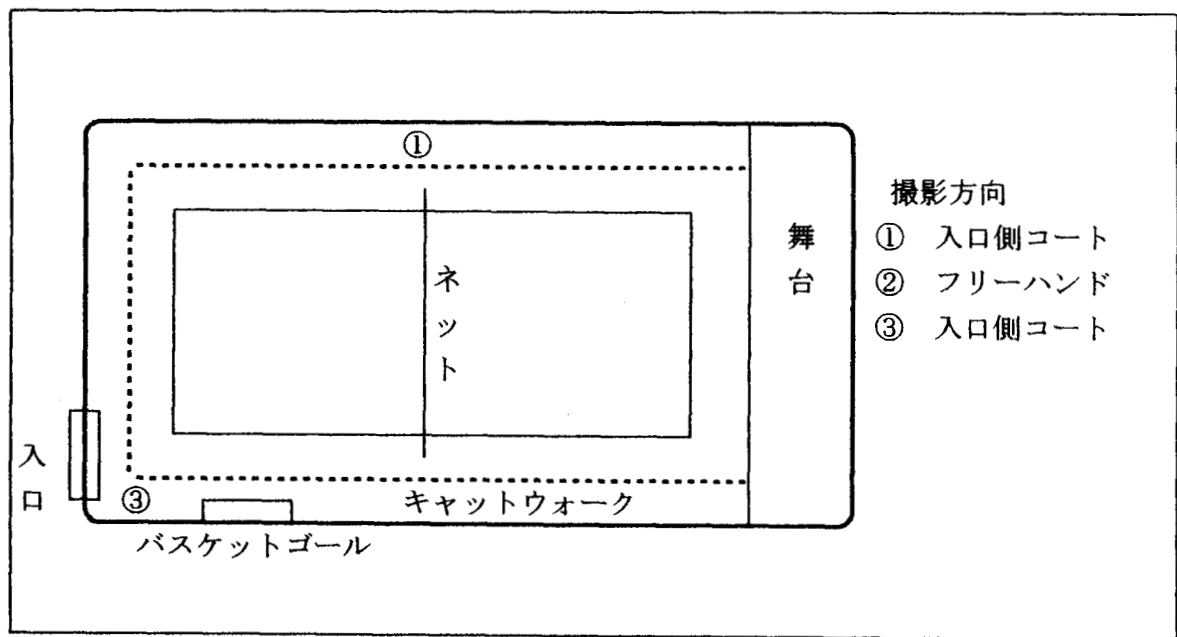


図1 ビデオカメラ配置図 (1999年8月27日)

2. ソーシャル・リフレクションとカスケードイングについて

2-1 ソーシャル・リフレクションについて

マッキープニーによれば、ソーシャル・リフレクションとは、「直接見ることのできない関連した行動を、そのときに見ることのできる他者の行為をモニターすることで見るということ」(McIlvenny[1995:133])である。それは、彼によれば、「局域的アクセスと他者排除的相互拘束を補償する現象」(McIlvenny[1995:133])である。

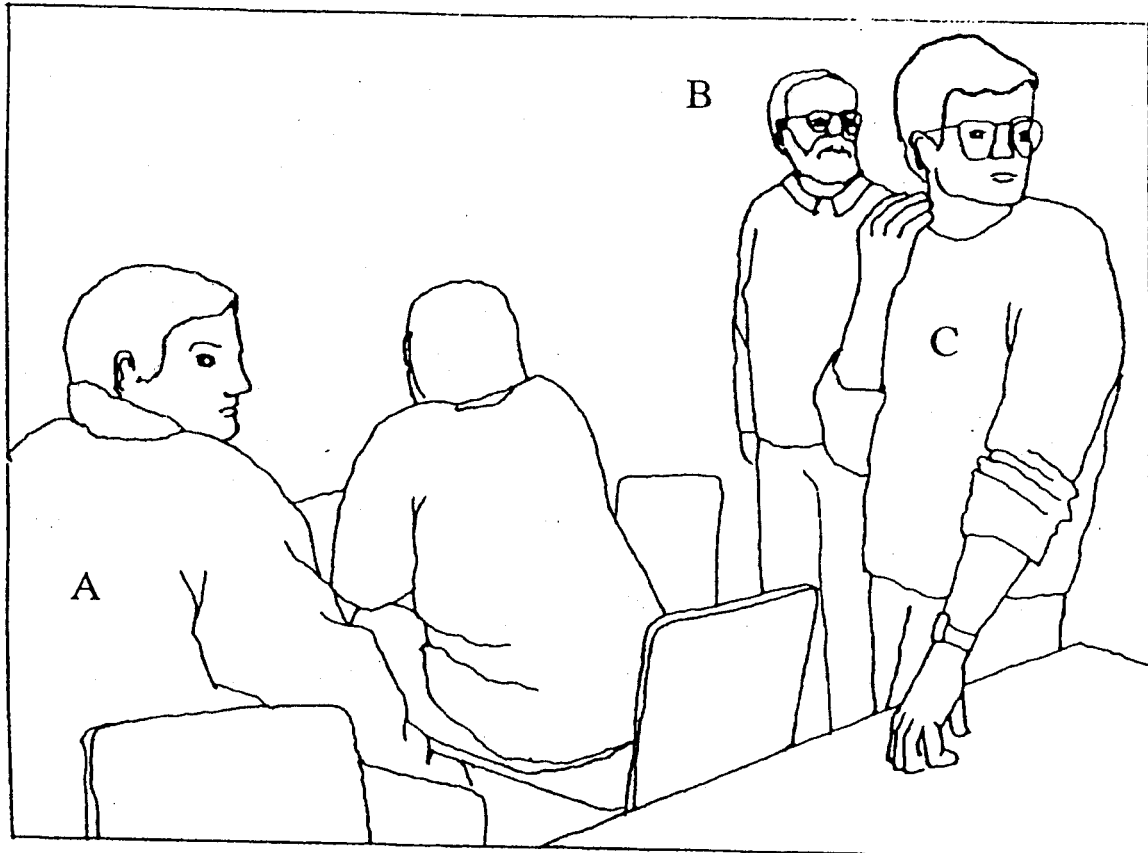


図2 ソーシャル・リフレクションの図 (McIlvenny[1995:133])

マッキープニーの議論 (McIlvenny[1995:132 - 133])によれば、人間は通常、自分の視界の範囲 (前方およそ170度程度) しか見ることができない。そのため、視覚を用いる相互行為の場合、繰り返し物を見たり、何かを見ようと、首が振れてしまう原因となる。「これらのふるまいは、特定の範囲で相互に排他性を生じてしまうという束縛を避けられない。それはもし、誰かが一方の視界に焦点を当てた場合、必然的にもう一方の視界は除外されてしまうということである。なぜなら、人間は両方を同時に見ることはできないからである」(McIlvenny[1995:132 - 133])つまり、視覚を用いた相互行為の場合、どうしてもアクセスは局域的にならざるをえない。それはお互いにお互いを見合う、他者排除的かつ相互的な拘束であるということ、である。

図1は、ホールにいた三人のうち、Bがまず振り返り、そしてCが振り返り、Cを見た

Aが振り返ったところである。「ろうコミュニティにおいて、光が点滅することは、全員が同時に知覚できることであり、グループの注意を引きつけるための共通のシグナルである。おそらくこのような慣例のために、Bがまず振り返ってホール後方に目を向ける。それからCが振り返り、AはたまたまCを見た後にそれに従う」(McIlvenny[1995:133])そして、そのようにCやAは、Bの行動を見て行動した結果、「この際、三人がこのようにして、自分たちに関係しているかもしれない行為に注目している」(McIlvenny[1995:133])ということである。これこそが、マッキーブニーの言う「直接見ることができない関連した行動を、そのときに見ることのできる他者の行為をモニターすることで見るということ」(McIlvenny[1995:133])である。

では、今起きつつある行動を、「直接見ることができない」にもかかわらず、なぜ自分に「関連した行動」であると言えるのだろうか。

それは、例えば、その場が自分に関係のあることが起きるのであろう場であるという、文脈に依存した注目、つまり文脈依存性に基づくと考えられるだろう。そして、何かしら起きたことが自分に関係あるかどうかを吟味した結果、そのような現象が現れるのだ、と言うこともできるだろう。しかし、そのような吟味が不断に行われているということは不自然である。むしろそれよりは、お互いがお互いに相手が自然言語の習熟の中にいると期待すること、という、期待の循環としてとらえるべきではないだろうか。

正面の人の行為が、社会から乖離した、突発的な筋肉の運動や発声ではなく、何かしら意味づけられたものであるであろうと信じているからこそ、そしてその人にはわたしに見えていないものが見えているであろうという期待があるからこそ、「直接見ることのできない」行動を「関連した行動」と考えることができるのである。加えて言うならば、「考える」という能動性すら不正確ではなかろうか。行為を自然言語の中に位置づけし意味づけすることで行為は解釈可能で反応可能なものになり、その現れとしてソーシャル・リフレクションは考えるべきであろう。

2-2 カスケーディングについて

マッキーブニーによれば、カスケーディングとは「理解を達成した集団から、理解を達成していない集団への、情報の移行においてなされる伝播、または連鎖反応(chain - react)などの諸活動」(McIlvenny[1995:133])であり、ソーシャル・リフレクションと並んで、局域的アクセス(local access)と他者排他的拘束(mutual exclusivity constraints)を補償する現象である。

次の頁の図(図3)は、デフリーダー(DL)が、解散しかけたメンバーに、言い忘れたことを伝えようとしている場面である。

リーダーは、注意散漫になった左側の集団に、手を振って注意を促す。すると、グループの他のメンバーが、同様に手を振って、同じようにその集団に注意を促す。注意を向かせる、という行動の伝播が、部屋の後方まで伝わる。そのとき、違うことに従事しているメンバー(図中のA)は、デフリーダーへのアクセスが制限されている。しかし、彼らがたまたま周囲に注意が働いたときに、デフリーダーに注目する周囲の人々が目に入る。そ

のことによって、アクセスが制限されていた人も、再びデフリーダーに注目するようになる。

つまり、カスケードイングとは、ある一点からあたかも滝 (cascade) の流れのように全体に伝播していく様子のことである。

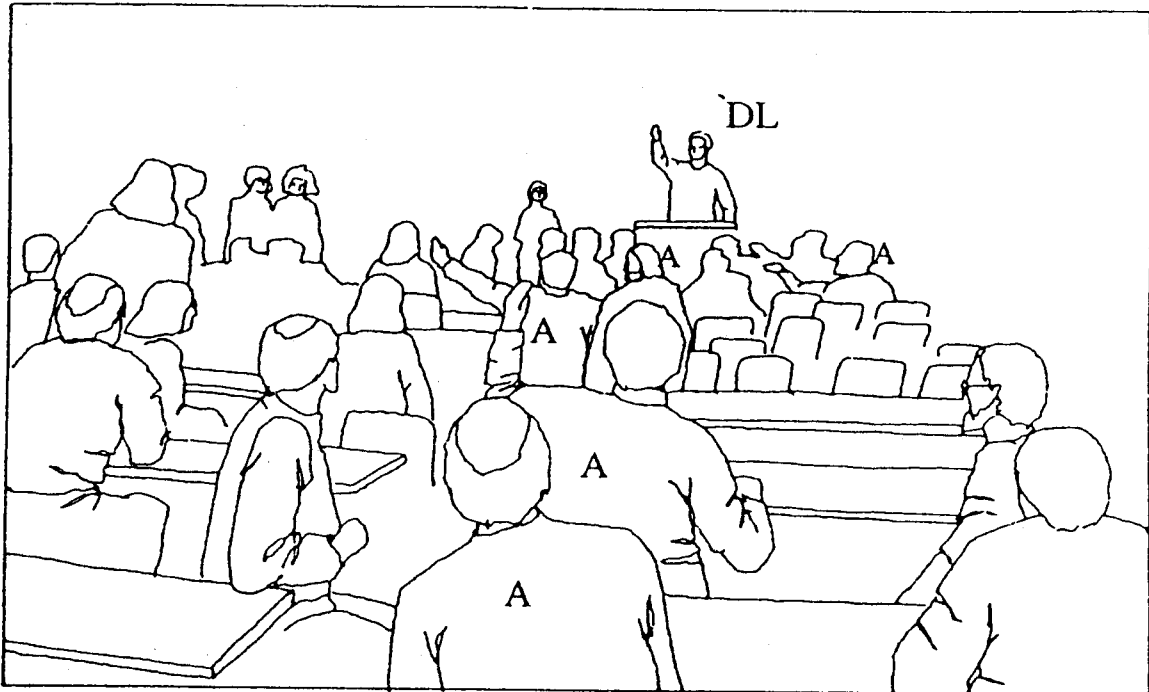


図3 カスケードイングの例 (McIlvenny[1995:134])

視覚を用いる相互行為の中では、前述のように局域的アクセスと他者排除的拘束が観察可能であるが、その中での期待の構造としては、お互いに排除し合っていることが前提としてあるのだから、つまりは「分かち合う」ということ、自分が知ったことは伝えていくこと、そして相手もそうしてくれているであろうことである。つまり、カスケードイングとソーシャル・リフレクションは、お互いに相補的な関係にあると言える。

3. 観察でのカスケードイングとソーシャルリフレクションについて

観察の場面は、レシーブ練習に移行するときに撮影の都合で、使用するコートの変更をコーチに依頼してコーチが準備中の他のメンバーにコートの変更を指示し、実際にメンバーが移動を開始している場面である。この場面ではカスケードイングとリフレクションが行われている。

8:48:03 (図4) のコーチの指示が基点となり、8:48:17までにカスケードイングが行われ、全ての参加者に指示が伝わっている。

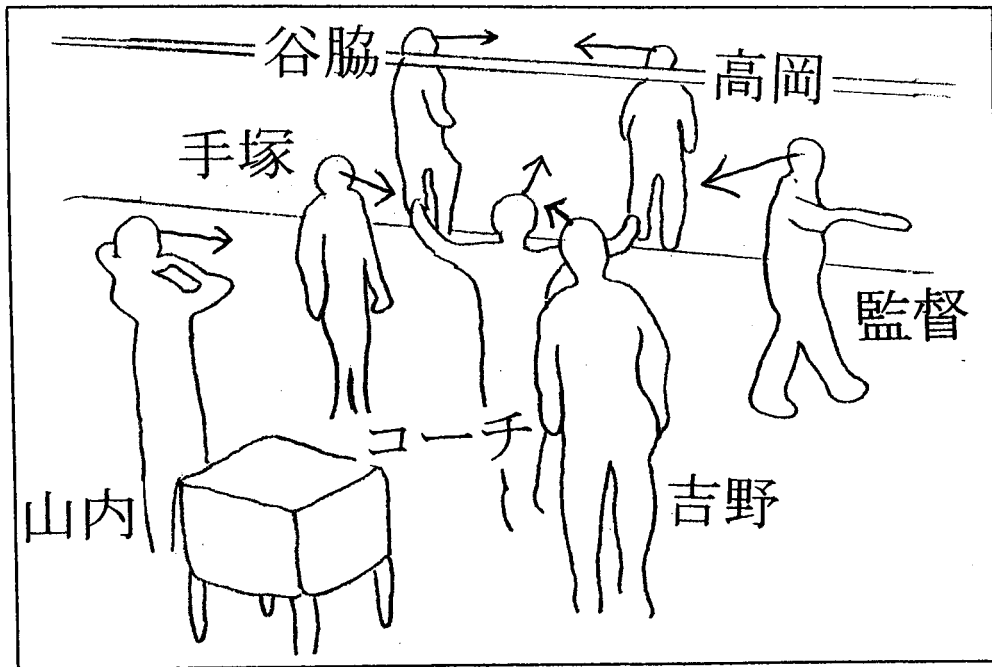


図4 コーチの動作 (矢印は顔の向きを表す)

コーチの指示に初めに気がつくのはコーチの方向を向いていた手塚である。彼女はすぐに、コーチと同じようにジェスチャー（手招き）で他のメンバーを入り口側コートに呼び戻そうとする（8：48：04）（図5）。

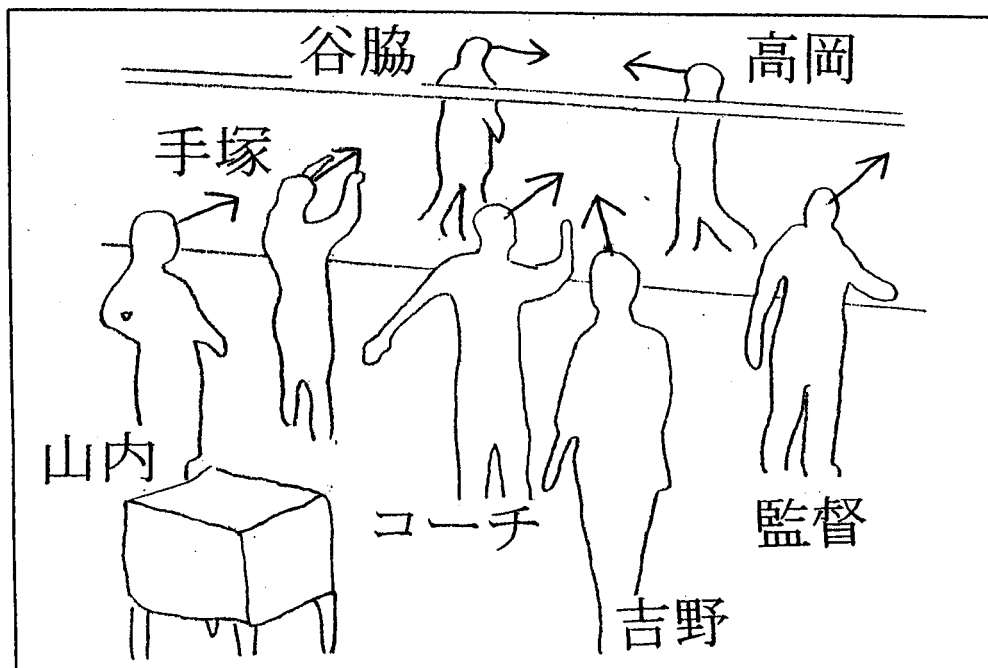


図5 手塚の動作 (矢印は顔の向きを表す)

この後、すぐにコーチに視線を向けた監督は、その意図を理解して手塚やコーチと同様にコート全体に対してメンバーを呼び戻そうとジェスチャー（手招き）を行っている。（8

: 48 : 07) (図6)。

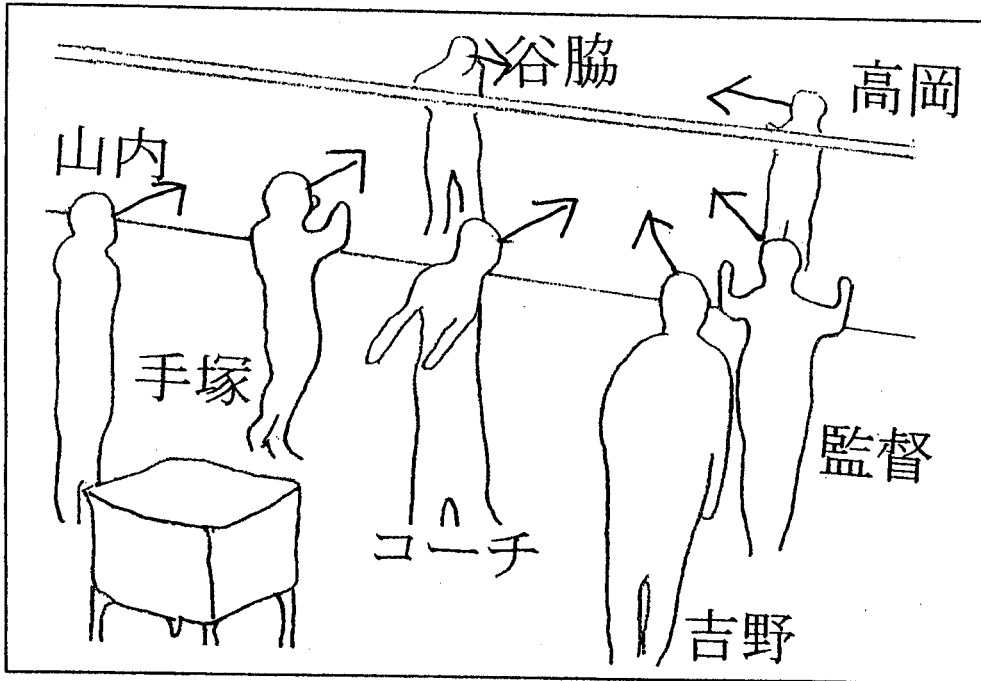


図6 監督の動作 (矢印は顔の向きを表す)

指示の伝達に時間がかかるのは、コーチから距離が舞台側コートにいて、コーチから遠い谷脇、高岡、小山、一枝の四人である。小山は監督とコミュニケーションを行っており指示の実行までに時間がかかる。

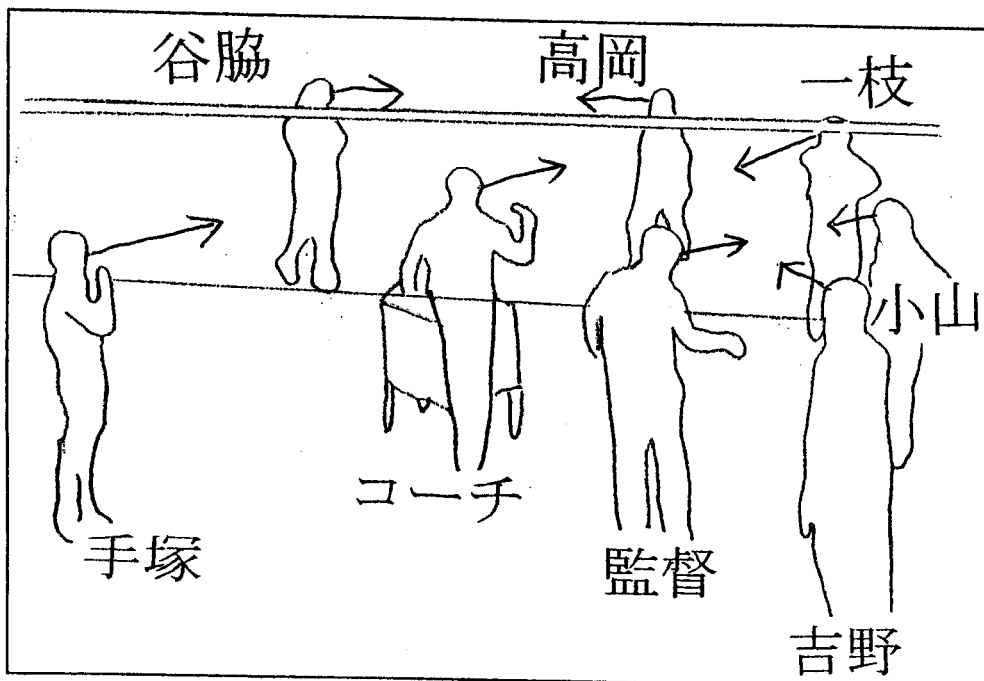


図7 コーチの一枝への指示 (矢印は顔の向きを表す)

しかし、この時点（8：48：10）では、すでに監督にコーチの指示が伝わっており、コーチも監督に指示が伝わっていることを認識しているので、コーチは小山には直接指示をしようとしな。一枝は監督の方を向いていたが、近づいてきたコーチの出した指示（8：48：14）（図7）を見てそれを理解し、移動を開始する。

谷脇、高岡の二人は手話でお互いに話をしており、指示が伝わっていないが、コートの変更の指示を認識して移動している一枝が谷脇の視覚に入ったときに移動を開始している（8：48：18）（図8）。

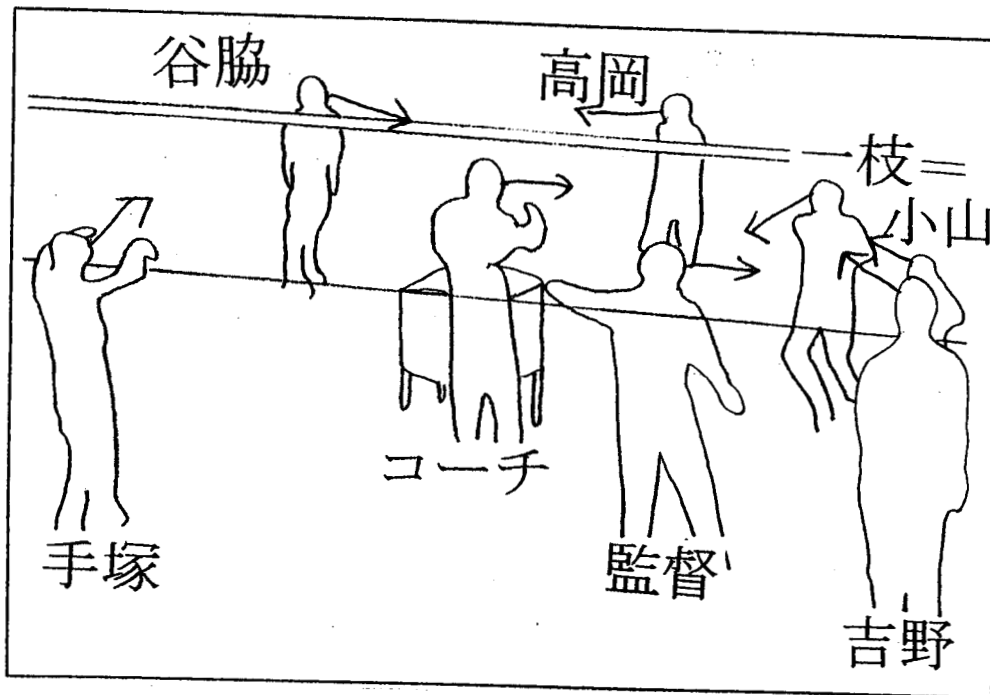


図8 一枝の移動を見る谷脇（矢印は顔の向きを表す）

この谷脇の移動につられるかたちで高岡も移動を開始する。このように、コーチの指示はその指示を理解した者に広がり、理解した者を通して、さらに広がっていく。

また、この場面において、谷脇と高岡の間にはカスケーディングと同時にリフレクションが起こっている。8：48：17から8：48：20にかけての時間帯は、カスケーディングによりコーチの指示がある程度、参加者に認識されている。しかし、谷脇と高岡の二人は手話で話をしているため、コーチの姿を見ることはなく、当然、指示は伝わらない。

偶然、一枝の移動を視界に入れた谷脇が一枝の移動する方向に同じように移動を開始する。谷脇に移動につられて高岡も同様に移動を開始する。この移動はコーチの指示を直接、コーチから伝えられたのではない。なぜなら、8：48：20には、二人は近づいてきたコーチに直接移動を指示されて急に移動の速度を早めるからである。

4. 考察

この場面で起きていることは、女性のチームが舞台側のコートに移動し、コーチの指示を受けて入り口側のコートに移動するということである。そして、女性のチーム以外のメンバーは、あたかも女性のチームの動きに連動して移動しているように、当初、入り口側のコートに滞留しており、女性のチームの移動が開始されると、入れ違うように舞台側に移動している。

仮に、コーチの動作そのものに「コート入れ替え」という明確な意味を認めるとするならば、その動作は、コーチの脳内に存在する意味の暗号化と解釈され、そして、それを受け取って行動に移ったメンバーはその暗号を解読した、とこのシーンを説明することになるだろう。

しかしながら、私たちの考察はそうした「暗号化—解読」という図式での解釈とは異なる。そもそも、私たちは相互反映性という概念でこの場面を考察するので、コーチの動作そのものに意味があることを前提に議論を始めることはしない。そのかわりに、以下のように考えるのである。

この場面において、このコーチの動作の意味は、メンバーに「コートの入れ替え」として知覚されてはじめて「コートの入れ替え」の指示となるのである。コーチの指示の意味は、前者の解釈のように、コーチの脳内にあらかじめ存在していたものではなく、メンバーによってその場面において形成された社会的達成物として解釈されるのである。

5. おわりに

マッキーブニーが示した (McIlvenny[1995]) カスケーディングとソーシャル・リフレクションは、視覚の様相を補償する現象であった。それは道具でも規則でもなく、観察可能な現象である。それがフィンランドのろうコミュニティに限られた現象ではなく、日本のろうスポーツの現場においても観察可能であったこと、つまり、フィンランド手話であるとか、そういう特殊性においてカスケーディングやソーシャル・リフレクションが成り立っているわけではないという観察を、私たちは提示した。

さらに、カスケーディングの場において、メンバーの情報伝達過程がいかんにして成り立っているのか、と言う疑問に答えるかたちで、エスノメソドロジ—的な観点から、その場における「相互反映性」の重要性を確認するに至った。

謝辞

この論文を書くにあたって、金澤貴之氏 (筑波大学心身障害学系)・中野聡子氏 (筑波大学大学院心身障害学研究科)・岡田光弘氏 (筑波大学大学院体育科学研究科) の三氏には、1999年8月の中間発表において貴重な意見と指摘を頂いた。なかでも金澤氏には、マッキーブニーの論文 (McIlvenny[1995]) を紹介して頂き、抄訳も頂いた。清原健司・

嘉美（とくしまボランティア推進センター）両氏には、分析に用いたビデオの内容、特に、手話の読み取りについて協力して頂いた。また、高木竜輔氏（徳島大学総合科学部人間社会学科）には、原稿を推敲する際に助言して頂いた。これらの助力なしには、私たちの研究は完成することはなかった。ここでお礼を申し上げたい。

参考文献

- Coulon, Alain 1996 *L'ETHNOMÉTHODOLOGIE*, Presses Universitaires de France.
= 1996 山田 富秋・水川 喜文訳、『入門エスノメソドロジー — 私たちはみな実践的社会学者である —』 せりか書房。
- 藤田 紀昭 1998 『ディサビリティ・スポーツ — ぼくたちの挑戦 —』 東林出版社。
- Gannon, Jack. R 1981 “Sports” *Deaf Heritage*: Jack. R Gannon National Association of the Deaf 271 - 316.
- 浜 日出夫 1992 「現象学的社会学からエスノメソドロジー」 山崎 敬一・好井 裕明（編）『エスノメソドロジーの現実』 世界思想社。
- 市田 泰弘・榎田 美雄 印刷中 「言語としての手話・文化としてのろう」、『徳島大学社会科学研究』 13：（頁数未定）。
- 石川 准・長瀬 修（編） 1999 『障害学への招待 — 社会、文化、ディスアビリティ —』 明石書店。
- 木村 晴美・市田 泰弘 1995 『はじめての手話』 日本文芸社。
- 木村 晴美・市田 泰弘 1996 「ろう文化宣言」 『現代思想』 24 - 5：8頁 - 22頁。
- McIlvenny, Paul. 1995 “Seeing Conversation: Analyzing Sign Language Talk” Paul ten Have & George Psathas (eds.) *SITUATED ORDER*: University Press of America, 129 - 150.
- 西阪 仰（編） 1997 『語る身体・見る身体』、ハーベスト社。
- Psathas, George 1995 *CONVERSATION ANALYSIS*, Sage Publications. = 1998
- 北澤 裕・小松 栄一訳 『会話分析の手法』 マルジュ社。
- 総理府 1998 『障害者白書 平成10年度版』 大蔵省印刷局。
- 好井 裕明・山田 富秋・西阪 仰（編） 1999 『会話分析への招待』 世界思想社。

障害者スポーツにおける相互行為分析

—平成11年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書—

2000年2月1日発行

編集 榎田美雄

発行 徳島大学総合科学部人間社会学科国際社会文化研究コース
現代国際社会分野『社会調査実習報告書』刊行プロジェクト

〒770-8502

徳島県徳島市南常三島町1丁目1番地

☎(088)-656-9308 (榎田研究室)